

# 町長 ひとりごと

齊藤 讓

## 気配り

私は、町行政委員の親睦旅行に合流するために乗った、新潟行きの上越新幹線の車中で、この原稿を書きはじめています。この「ひとりごと」の原稿は、私の怠慢から今まで一度も〆切日に間に合ったことがない。広報担当の花沢徳子さんには、迷惑のかけ通しであり、申しわけなく思っています。今月こそは、ここでまとめて、彼女を驚かせてやりたい。

さて、今回は、この列車に乗る二時間ばかり前の、小さな出来事を書いてみようと思う。私は、横芝駅から特急しおさい号に乗って、東京に向かっていった。佐倉に近づいた頃、私はタバコに火をつけた。久しぶりの一人旅のこともあって、ゆったりとした解放感の

中で味わう一服の味は、また格別であった。車中は指定席で、私の反対車窓に三・四人乗っている外は、前の方にまばらに乗客が散らばっている程度のがラ空き状態であった。二・三服吸った頃、反対側に



座っていた中年の紳士が、私の側に寄ってきて「すみませんが、この車輛は禁煙ですよ」と注意してきた。私は、タバコに火をつける

前に、この車輛は半分が禁煙席で、自分の席は外れていることを車内表示で確認していたのである。一瞬、ムツとした気持ちになって「冗談ではありませぬよ。ここは禁煙席ではありません。あの表示をよく見てくださいよ。」と反論しようと思ったが、紳士の態度があまりにも真険であり、また周囲で喫煙している者もいなかったため、出かかった言葉を飲み込み、「どうも、すみません」といって急いで

火をもみ消した。しかし、つかの間の、のどかな気分を打ち破られて、私の心の片隅には、かすかな不満が残った。間もなく、車掌が廻ってきたので「この車輛は全席禁煙席ですか」と聞いてみた。車掌は、「前の方の半分が禁煙席です。ここは喫煙しても結構ですよ。」とあたりに聞こえるような大声でいった。

紳士は、思わず顔をそむけたようであった。私は、何か胸のつかえが下りたような気がした。その時である。後の

方の座席から、紳士の奥さんらしい方が小さな赤ん坊を抱いて、娘さんといっしょに紳士の側に移動してきた。どうも様子では、赤ん坊は娘さんの子供らしく、両親でこの母子を夫のもとに送り届ける途中のようであった。

してみると、あの紳士の一言は、生まれたばかりの可愛い初孫を、タバコの煙から守ろうとする肉親の心情から出た一途なものであったのかと瞬間思い知った。

赤ん坊が乗っていたことを知らなかったとはいえ、自分の軽率さに顔が赤くなるほど恥ずかしく、心が動揺した。私は、このささやかな出来事の中に、何かを守ろうとする者の真の勇気とその尊さを知り、気配りの大切さを改めて痛感した。

列車は今、国境の長い大清水トンネルを抜け、間もなく長岡に到着しようとしている。私は、周囲を見廻して、からゆっくりタバコに火をつけた。この一服は、複雑な味がした。

## 宿泊場所が 伊東市に！

